

Adhimukti y śraddhā

— 化城・五百弟子・法師品を中心として —

望 月 海 淑

1

先号(四十八号)において、譬喩・信解・藥草喩の各品における Adhimukti と śraddhā についての考察をしたのであるが、今号においては、それに引続いて化城喩・五百弟子授記・法師品等におけるそれについて考察を進めてみよう。しかし、前二品が第一類成立の法華経であるのに対して、後者は第二類成立の法華経であるといわれるのであるから、この各品を同列に扱うことは問題があるところでもあるが、一応同列に扱うことにし、もしも第一類、第二類成立の法華経の両者に際立った相違が認められるならば、それはその折に指摘をする所存でもある。

2

化城喩品は(正・往古品、梵 Purāyoga parivarta)は釈尊が富樓那 Purā 等の五百人の下根の弟子を救うために過去の因縁を語ったものである。その中で大通智勝如来の十六王子として釈尊や阿弥陀仏等の前生を物語っているが、その中で十六王子の出家を次のように示している。

十六王子皆以童子出家而為沙弥⁽²⁾

十六王子はまだ童子であつたので、先ず沙弥となつたのは当然のことであるが、正法華經を見ると、そこには

十六國王太子以家之信出家為道皆為沙弥⁽³⁾

と示されており、妙法華經にはない「以家之信」という一句がつけ加えられている。家之信とはどのようなことであるるか。十六王子は大通智勝如来の出家前の王子であつたのだが、その父が如来となつた今、十六王子の家の信とはこの父なる如来への信なのか、その如来によつて説かれた教えへの信なのであるか。そこで、梵文法華經を見るとそこには次のように示されている。

te sodasa rāja kumarāḥ kumarabhūta eva samānāḥ śraddhaya agārād anāgarikāṃ pravrajitāḥ sarve
ca te śramaṇarā abhūvan⁽⁴⁾

十六王子らは童子であつたが同一の śraddha によつて家を出て出家者となり沙弥となつた、と。正法華經が家之信と訳出したものは、samānāḥ śraddhaya にあたるのであるが、これを同一の信と訳出する時、それは十六王子が全く心を一にして、同じ信を抱いたということを示すであらう⁽⁵⁾。してみると正法華經の家之信という訳語は、十六王子の立場がそれぞれがっていたのではなくて、全く同一の信をもつて出家したのだということになるであらう。いいかえれば、信は一つということになると思われる。

大通智勝如来はこの十六王子らが śraddha を生じたのを見、更に、彼等が仏の知見を志願し、深心に念ずるとの言葉を知つて、法華經を説かれたのであつたが、この時、法華經を聞いた彼等は⁽⁶⁾

十六菩薩沙弥皆悉信受。声聞衆中亦有⁽⁷⁾信解と、皆ことごとく信受し、声聞らも信解したとなされている。

この箇所の正法華経は

声聞歡喜。十六沙弥無數億百千姪諸菩薩衆皆得⁽⁸⁾二本志。

となっており、妙法華経が信受・信解と訳したところのものを、歡喜、得本志と訳出している。これに対する梵文法華経は

śrāvakās cādhimuktavantas te ca śoḍaśa śrāmaṇerā⁽⁹⁾

となっており、声聞たちと十六の沙弥とが adhimukti するものとなった、ことを示している。すなわち、妙法華経が信受といひ信解といつたもの、正法華経が歡喜といひ得本志といつたものは adhimukti の一語を訳したものであったことを知りうる。

そこでこれまでのところを整理すると、同じ十六王子に関する記述の中で、出家をして沙弥となった時には *śraddha* の語が使用され、法華経を聞いて自ら得るところがあった時には *adhimukti* が使われたということであり、前者については正法華経は信と訳し、後者については妙法華経が信受・信解の訳をあて、正法華経は歡喜・得本志と意訳をしているということである。そこで問題は法華経が *śraddha* と *adhimukti* の語を使いわけたのは何故であったか、或はこの二つの語にはちががあるのか、という所に存することになる。

人が出家をするというのは、単に家を出ることではなくて、愛するもの、欲するものの一切を捨て去ることを意味するから、そこでは異質の世界に入るための心の大転換がなければならぬ。その転換をおこさせるためのものは、

異質の世界Ⅱの世界（教え）に対する絶対的な信がなければ行なわれうる筈のものではないと思われる。十六王子の出家に因して *śradhā* が使われている時、この語は、仏を信じ信頼しまかせ切ってしまう心のあり方を意味するのではなからうか。これに対して信に入った後に、仏から法華経を聞き得た十六王子が得たものは、聞法者としての仏の教えを *adhimukti* したという心の安定であり、心がふっ切れたという状態への到達を意味するであろう。 *adhimukti* がそこで使われる時、それはこのようにことを示そうとしたのではないかと一応は思われる。⁽¹⁰⁾

3

化城喻品は十六王子が菩薩となり、やがてそれぞれが仏となることを示すが、それに続いて、声聞である人々も十六王子らの法華経の説示を聞いて、順次に仏道に入るであろうことを示している。何故に順次であるのかの理由を示して妙法華経は

如来智慧難信難解⁽¹¹⁾

であるからとしているが、これについての正法華経の記述は

如来之慧難限難計⁽¹²⁾

とあるから、その意は両経同様であるといえるであろう。而して梵文法華経は

duradhimocyan hi bhiksavas tathāgata jñānam⁽¹³⁾

と示しているから、ここで難信難解と訳されたものは *dur-adhimocya* の訳語であることが解るが、これは法師品の中で仏が薬王菩薩にむかって、法華経は難信難解であるところとは言葉を異にしている。⁽¹⁴⁾

何故に *adhimukti* に入ることが困難であるとせられたのか。梵文法華經はその辺のところを、汎山な人々は我々（十六王子）によって無上等正覚に導かされた。比丘らよ、彼等は今日声聞の地位に住しており無上等正覚に成熟せしめられている。これが無上等正覚への順序である。それは何故か、比丘らよ、如来の智慧は実に *adhimukti* しがた（15）いからである。とのべている。難信難解といわれた主人公らは声聞の地位におり、最高の覺りに到達するために訓練されつつあり、それが順序であるとされる時、それはまだ彼等が最高の仏の覺りに到達していないことを示している。そして、この順序が守られるのは仏の智慧が *adhimukti* し難いためたという時、この言葉はどうも單純に「信」と訳されて済むものかどうか疑問があるように思われる。十六王子に関する記述の中では、十六王子が最初に「信」*dha* をおとし、得るところがあった時に *adhimukti* が使われていたが、両者の語の間にこのような相違があるかもしれないという一つの仮説を立ててみると、声聞たちは十六王子らになった菩薩によって *adhimukti* の状態を得るために訓練されつつあるということになるであろう。

この言葉に続いて仏は一仏乘においてのみあることを述べ、更に法華經を説くための条件として、

若如来自知_て涅槃時到。衆又清淨信解堅固。了_達空法_二深入_中禪定_上。（16）

と語っている。しかし、仏はこの世が乱れているために方便をもって涅槃を説いたのだとして、その時に説いた方便の涅槃について、

説_二於涅槃_一。是人若聞則便信受。（17）

としてゐる。これに対する正法華經には

若有_二供養_一以_二清淨行_一。信_三樂妙言_二趣于經典_一。一心定意為_二大禪思_一。……………如来滅度時。若有_二聞_レ説歡喜信者_一。

仏思所護。(18)

とあって、信解を信案と訳し、信受を信と訳している。これらがどのような意味あいで使用されたのかについて、梵文法華経を参証して見ると次のように記されている。

yasmin bhikṣavaḥ samaye tathāgataḥ parinirvāṇa kala samayam ātmanah samanupaśyati parisuddhāṃ
ca parśadan paśyaty adhimukti sārāṃ śūnya dharmā gatīm gatām dhyanāvatiṃ mahādhyānavatiṃ | ...
tathāgatas tan nirvāṇam bhaṣate yad adhimucyante. (9)

すなわち、如来は完全な涅槃に入るべき時期を見きわめ、会衆が清淨で adhimukti が堅固で空法を理解し、禪定に
つとめ、大禪定にふけるのを知って……如来は adhimukti しているものが涅槃だと説く⁽²⁰⁾というのだが、前者の
adhimukti は衆生が一仏乘（法華経）を説くべき心の状態に立ち至ったことを示すために使用され、後者は声聞・
縁覚が adhimukti している状態をそれが涅槃だと説いたのだ、というために使用されている。このことは、すでに
仏道を心がけている者が、仏から教えを聞くために到達しておかなければならない一つの心の状態を adhimukti と
名付けたのではないかと思わせる。しかし、それでは adhimukti はどのような心の状態をいおうとしたものである
のか。

化城喻品の初めの部分で、大通智勝如来の三千塵点劫の説示に続いて、十六王子がこの仏に法輪を転じたまえと懇
請して偈を語っているが、その偈の末尾のところだ、こう示されている。

欲業及修福 宿命所行業

(21)

世尊悉知已

當「転」無上輪

正法華經は

普見^二知黎庶^一 心本所好樂^一

則為^二轉法輪^一 最勝無等倫^一

勉勵^二衆生厄^一 悉令^レ至^二大道^一 (22)

であり、梵文法華經は

carāṇā ca jñānaṃ pi ca sarva jānasi adhyāsayaṃ pūva kṛtaṃ ca puṇyaṃ |
adhimukti jānasi ca sarva prāṇināṃ pravartaya cakra varaṃ anuttaram iti ||

として、行いと智慧と欲求と前生の行いによる功德とをすべてあなたは知っている。一切の生命あるものの adhim-
uktih もあなたは知っているから、無上の法輪を転じたまえ、との意を示している。

妙法華經では adhimukti が adhyāsaya と一緒になって欲樂と訳され、正法華經は衆生の厄を脱すると意識されていると見てよからう。もしもこれがゆるされるならば、ここでの adhimukti は樂うことであり、災厄から解脱することの意にとり扱われていることになる。しかし、災厄からの解脱は三界からの脱出と同じようなものであり、それは法華經が目指す仏の境地と同一ではないといえるであらう。(24)

このことについては更に、一仏乘においてのみ仏道に入る道であることを釈尊が語る段において再説されている。すなわち、そこではこう示されている。

知其志^二衆小法^一深著^二五欲^一。為^二是等^一故説^二於涅槃^一。是人若聞則便信受。(25)

これは二乘では決して成仏出来なくて、成仏の道は一仏乘だけであるが、衆生が劣っており五欲に著しているので、

やむなく方便をもって涅槃を説いたのだが、衆生らはこの方便による涅槃をもって信受したというのであるが、正法華経もまた

其樂二下劣小乘行一者。則自亡失遠乎人種。不レ解二人本一為欲三所縛一。如来滅度時。若有レ聞レ説歡喜信者レ仏恩所護（26）

dura prañāsam satva dhātum viditvā hinābri ratām kāma pañka magnāms tada eṣāṃ briksavas
tathāgatas tan nirvāṇam bhāṣate yad adhimucyante.⁽²⁷⁾

として、世界の衆生が墮落し、劣った樂しみ、愛欲の泥土に沈められているのを知って、彼等が adhimukti しているのが涅槃であると語った、となしている。ここでは方便による涅槃を信受したという妙法華経に対して、彼等が adhimukti したものは方便の涅槃だと順序が入れ変わっているだけのことで、ここで彼等が adhimukti したものは釈尊の本懐たる究極のものへの信ではないことは明白である、といえよう。

化城喻品における śraddha と adhimukti の二語は以上の箇所に使われただけであるが、以上、見て来たところによると、adhimukti の語はたとえ「信受」と訳されることがあったとしても、それは一つの心の境地であり、直ちにひたすらに信ずるといふ宗教的な行動にそのまま結びつくものではないかと思われる。

4

五百弟子授記品（正・授五百弟子決品、梵 pañcabhikṣusāta vyākaraṇa parivarta）は釈尊が富樓那への授記を語っているが、その中で釈尊が、偈を語るが、その冒頭の所で続けて adhimukti が語られている。すなわち、

知^マ衆衆ニ小法一 而畏^マ於^マ大智一 是故諸菩薩 作^マ声聞緣覺一 (28)

と妙法華經にはあり、正法華經には

此諸衆生 脆劣懈廢 故当^マ演^マ説 微妙寂靜一 示^マ現声聞 緣覺之乘上 (29)

とあり、衆生は小法を樂うものであり、劣り懈廢なものであると、指摘しており、梵文法華經の第二偈は、

hinādhimuktā ima satva jñātvā udāra yāne ca samutrasanti |

tatu śrāvakā bhont imi bodhisattvaṃ pratyeka bodhiṃ ca nidarśayanti || (30)

衆生が劣った adhimukti にいるのを菩薩等は知って、声聞となり緣覺となり最高の乗物にのせ教示するとしている。すなわち小法を樂うといい脆劣懈廢といわれたのは、劣った adhimukti のことであることは明白である。

そして釈尊は更に言葉をついで、

雖^ニ小欲懈怠一 漸当^ニ令^ニ作^ニ仏一 (31)

と語るが、正法華經もまた

下劣懈廢 恣尚慢墮 而當^ニ漸渡 皆成^ニ仏道一 (32)

と同一の内容を語り、梵文法華經もまた

hinādhimuktās ca kusīda rūpā anupūrvā te sarvi bhavanti buddhah |

劣った adhimukti の意墮な彼等はすべて次第に仏となる、として阿漢訳と全く同じ意向を示している。すなわちここでの adhimukti は明らかに人々が仏を求めて歩むべき時のひたすらな心の行動のあり方を示すのではなく、善きにつけ悪しきにつけ、その時の心の状態そのものをさしているといえよう。

法師品（正・藥王如來品、梵 *dharma bhāṣaka*）は法華經の一句一偈でも聞いて一念隨喜するものには、菩薩・声聞その他いかなる人でも授記を与えることが示され、そのために五種法師が説かれ行うことが強調されている。そのためこの品は今までの諸品とは質を意にしており、成立史の面からいって、⁽³⁴⁾化城喻品、五百弟子授記品と同時に言及すべきものではないとは思われるが、一応、資料の羅列の意味でここに列記しようと思う。

法華經の受持・読・誦・解説・書写を説く法師品は、そのような行い（五種法師）をする人は如来を肩にする人であり、如来によって遣わされた人であることをのべ、更に偈がのべられている。そしてその後の長行の中において、何故に法華經の五種法師が仏道を成ずるために重大な行いであるかについて釈尊は述べようとするが、その冒頭でこう語っている。

此法華經最為難信難解⁽³⁵⁾

これに対する正法華經は

最尊第一。普天率土所不信樂⁽³⁶⁾

であって、法華經はあまねく人々によって信じられ難いものであることを示すが、梵文法華經もまた、

ayam eva dharma pariyāḥ sarva lokāvipratyanikāḥ sarva lokāśradadhāniyāḥ⁽³⁷⁾

と、この法門は一切世間にうけ入れられず、一切世間に信じられずとして、全く同じ意を伝えている。

すなわち難信・不信樂と訳されたものは、*aśradadhā*という否定型であるが、法師品は更に言葉が続けて信ぜられ

ないのは、法華経が諸仏の秘要蔵にして、如来の現在ですら怨嫉多いものだから、滅度の後では当然のことだとして
いる。しかし、それだからこそ法華経は説かれなければならないとして、この時に法華経を受持し説誦する人は如来
と共に住する人で、如来によって頭をなでられるべき人だとしている。その理由は仏滅度の後に迫害多き法華経を説
く人は、大信力の所有者だからであった。すなわち、

是人有大信力及志願力諸善根力⁽³⁹⁾

というのがそこどころだが、正法華経もまた

諸信力也。善本力。志願力⁽⁴⁰⁾

と訳し、梵文法華経も

pratyātmiṅgaṃ ca teṣāṃ śraddhā balaṃ bhaviṣyati kuśala mūla balaṃ ca praṇidhāna balaṃ ca⁽⁴¹⁾

彼等には śraddhā の力、善根の力、誓願の力が内在されているであろうとして、śraddhā は法華経の弘経者が保持
しなければならない心のあり方の一つとして示している。そして大信力を有するが故に、それは行いにあらわれて来
るが、その所を梵文法華経は、

ya imāṃ dharma pariyāyaṃ tathāgatasya parinirvṛtasya śraddadhiṣyanti vācayisyanti……⁽⁴²⁾

として、仏滅度の後にこの法門を彼等は śraddha し、語るであらうとなしているが、この文章に關する正法華経は、
仏滅度後。若有信⁽⁴³⁾此正法典⁽⁴³⁾一者。

と訳され、妙法華経は先の大信力云々の文章の前で

如来滅後。其能書持説誦供養為⁽⁴⁴⁾他人⁽⁴⁴⁾説者。

と訳して、*śraddhā* は意識されている。(45)

右三箇所の *śraddhā* の使用例に見られるものは、法華經を説くために所持しておらなければならぬ心のあり方であり、この心のあり方がある時に法華經の説示が可能であることを言及したものと理解されうるであらう。

法師品のこれらの *śraddhā* の使用例に続いて、*adhimukti* の使用が見られるが、それは前掲の文に引き続いたもので、法華經を聞いて読誦・書持等をするものは菩薩の道を行ずるものだったとすぐ後に、

若見^三若聞^二是法華經^一。聞已信解受持者。(46)

として、このような人は無上正覚に近づく人だとせられている。これに対する正法華經は

菩薩所行共行^レ法者聽者。信樂來入其中^一。(47)

となしている。これらに対する梵文法華經は、

ye tv imam dharmā paryāyam śrīvanti śrūtṣvā cādhimucyanti …… (48)

この法門を聞き、聞いて *adhimukti* するものは、とあって、信解・信樂と訳された言葉は *adhimukti* の訳語であることは明白である。しかして、衣座室の三軌を語り終った後の偈の冒頭では、

是經難^レ得^レ聞 信受者亦難^レ值 (49)

と法華經の教えを聞くことも信受することもむづかしいことが説かれるが、これに対する正法華經も、

是法難^レ得^レ遇 信者亦難^レ值 (50)

と、同様のことが説かれ、梵文法華經もまた

durlabho vai śravaḥ sya adhimuktiḥ pi durlabha (51)

実に聞くことは得がたく、adhimuktiするよりも得がたいと同様のことを語っており、adhimuktiの語が信受と訳され信と訳されていることを示している。

そこで法師品における sradhā と adhimukti の二語の使われ方を比較してみると、一つのちがいが見られるように思われる。

sradhā の場合は、「この法門は一切世間に信じられない。」とし、「彼等には信力が内在されている」とし、「この法門を彼等は信じるであらう」として、法門というような絶対者をそのままに信じるという型で使われている。これに対して、adhimukti の場合は、「この法門を聞いて……」と、「この法門を聞くこと難く、adhimukti すること難し」として、法門が何であるかを聞いた上で、そこに立脚してという型をとっていることである。

尚、漢訳二経によると最後の偈が語られる直前の長行の中で、

(52)

聞レ法信受随順不レ逆

(53)

設使有レ聞而不レ樂者

とあるが、これらに対する梵文法華経は、この法門の説示を排斥し捨て去ることはないであろうとなされており、sradhā の語も adhimukti の語も使用されていない。

6

以上、見て来たところによると、sradhā は化城喻品で一度、法師品で三度使用されており、それを妙法華経は「信」と訳し、正法華経は「信」と訳し法師品で一度だけ「信樂」と訳されている。adhimukti は化城喻品で四度、

五百弟子授記品で二度、法師品で二度の使用例で、妙法華經の訳語は「楽」「信解」「信受」「欲」であり、正法華經は「楽」「本志」「信楽」「信」等の訳をなし、五百弟子授記品の場合のように意訳もなされており、このことは *śraddha* に比べて *adhimukti* の語は複雑な意味合いをもっていることを暗示するのかもしれない。

そして又、これらに見られる *śraddha* は仏或は經典に対する信を示すために使われているのであるが、それは方便品の三止三請の中で舍利弗が語る言葉 *yani bhagavato bhāsitaṃ śraddhasyaṃti* (世尊が説いたものを信ずるであります) というあり方に連がるものだと思われる。すなわち信 *śraddha* は、「信頼」することを意味し、師と仰ぐ人の教えを聞き、その人の教え、行動、その人自身に信頼すること、その規範を自分の行動と結びつけ、それがそのまま実践徳目とされるようになる、といわれる所以であらう。⁽⁵⁵⁾

これに対する *adhimukti* は、心の自由な、完全な状態をさすのである、⁽⁵⁶⁾ となされるように、それは信などによって得られる心の状態を意味するものと思われるので、時には心の到達点として信解と訳され、求めていた状態として楽(意向)などと訳されるのであらう。

しかし、⁽⁵⁷⁾ 法華經がこの両者の言葉を果して意欲的に使いわけたかどうかについては、更に研究を続けなければならぬ。

【註】

(1) 布施倍著法華經成立史・本田義英著法華經論参照。尚、布施博士は同書の中で、法華經の成立は少くとも四時期を經過せるもので、第一期には第一類の偏強先づ成立し、次いで其の長行の布衍を見たるは第二期であり、第三期は第二類の増補となり、斯くして次第に流行するに及びて囑累品(下)の増補となつたのが即ち第四期である。(p. 114)と結論づけている。又、本田博士は法華經を二大別して原始分法華經と後分法華經とにわけている。五百弟子授記・法師の両品の正法華經はその前半

に妙法華經にない部分をつけ加えているが、これは後から付加したものだとは本田博士の指摘するところでもある。(p116)

- (2) 大正九・25上
- (3) " 91下
- (4) kern 本 180、Watanabe・Gilgit 本 88
- (5) 岩本裕訳。法華經は心あわせて信仰をもって(中・59)と訳し、松濤誠康等訳。法華經は淨心によつて(212)、と訳し、南条・泉訳・新訳法華經は同じく信を以て(205)、と訳し、岡教達訳・梵文和訳法華經は同じき信仰を以て(318)と訳出している。
- (6) 大正九・25上・91下、kern 180・watanabe 88
- (7) " 25中
- (8) " 91下
- (9) kern 180、watanabe 88
- (10) 石上尊応・仏典に現われた bhakti 信の用例。印仏研究八(1979)・83参照。拙著・adhimukti と sraddha' 樓神四八号参照 p103~115
- (11) 大正九・25下
- (12) " 92中
- (13) kern 185、watanabe 90
- (14) 大正九・31中・101中 kern 230 法師品の難信難解は asrdadhanya の語になっているが、このことについては後に再説することになろう。
- (15) kern 185・岩本訳69~71、松濤訳218
- (16) 大正九・25下
- (17) " "
- (18) 大正九・92中
- (19) kern 186
- (20) 岩本・71~73、松濤・219
- (21) 大正九・23上
- (22) " 89下
- (23) kern 193

- (24) 梵文法華經には「わたくしどもは三界から逃れ出たことよって、さどりの境地を得たと思いましたが、わたくしどもは老令のためにもう疎しておりましした。」岩本上 p 225、k 101、大正九、16上、80上
- (25) 大正九・25下
- (26) " 92中
- (27) Kern 本 187、watanabe 本 61
- (28) 大正九・28上
- (29) " 96上
- (30) Kern 本 203
- (31) 大正九・28上
- (32) " 96上
- (33) Kern 本 203
- (34) 註(1) 参照
- (35) 大正九・31中
- (36) " 101中
- (37) Kern 本 230
- (38) 法華經を仏滅後に説けば災集まるというのは、法華經が成立した時の状況を示すものと、成立史上ではうけとることが出来るが、日蓮聖人の場合は、素直にこれをうけとめて、だから法華經を説くべき時だとなされた。たとえば開目抄には「当世、法華の三類の強敵なくば誰か仏説を信受せん。日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん」(590)といわれている。ここに見られるのは、法華經に対する唯一絶対な信ひとすじの心であるといえる。
- (39) 大正九・31中
- (40) " 101中
- (41) Kern 本 231
- (42) " 231
- (43) 大正九・101中
- (44) " 31中
- (45) 岩本訳・松海訳・岡訳もすべて、妙法華經の順序の通りになっており、南条泉訳が Kern 本の順序になっている。
- (46) 大正九・31下
- (47) " 101下

- (48) 大正九・三二上
- (49) 大正九・三二上
- (50) 〃 102上
- (51) 大正九・三二上
- (52) 〃 102上
- (53) 〃 102上
- (54) 石上善忠・仏典に現れたる *brahmi* 信の用例。(印度学仏教学研究八の二 p 83)
- (55) 全
- (56) 原美教授の「*Brahmi* 研究」(日本仏教学会年報二十八号)によると、*śraddha* の対象は知的・客観的なもので、人格乃至教義への信憑性への判断が前提となり、自己の知的納得を経過して、情緒的なものへと発展するだろうとなされている。又、金岡秀友教授の「密教における信構造の特色とその変化」(前掲書)によると、心が清浄となる信、事に依り人に依るの信で、仏説の心性が重んぜられれば *śraddha* であり、心に勝解を生じ、般若に力点がおかれれば *adhimukhi* である、となされている。